THE FUKUOKA
ASIAN CULTURE PRIZES

第11回
福岡アジア文化賞

THE 11th
FUKUOKA ASIAN CULTURE PRIZES

2000

大　　賞
GRAND PRIZE

プラムディヤ・アナンタ・トゥール	**Pramoedya Ananta TOER**
作　　家	**Writer**
１９２５年２月６日生	**Born February 6, 1925**
インドネシア	**Indonesia**

オランダでのプラムディヤ氏(1953-1954年)
Mr. Pramoedya in the Netherlands (1953-54)

政治犯として投獄されたプラムディヤ氏を流刑地ブル島に訪ねたジョン・フォード在インドネシア英国大使（右）（1977年）
Mr. John Ford, the British Ambassador in Indonesia (right), visited Mr. Pramoedya (at that time still in his capacity as a political prisoner) at the detention island Buru (1977)

1999年ノーベル文学賞受賞者ギュンター・グラス氏（左）と（1999年）
With Mr. Gunter Grass, laureate of the 1999 Nobel Prize in Literature (left) (1999)

民主人民党（インドネシアの青年、学生が設立した党）の件で7時間に及ぶ尋問の後、報道陣に取り囲まれるプラムディヤ氏（1996年）
Surrounded by reporters after a seven-hour interrogation by the attorney general in connection with the PRD party, a political party set up by the youth and students of Indonesia (1996)

略　歴

1925	中部ジャワのブロラに生まれる
1942-45	日本占領下
	ジャカルタにある日本の同盟通信社でタイピスト、後にタイプ・速記の講師
	ジャカルタの中央参議院付属の速記学校に在籍し、経済学、政治学、哲学を学ぶ
1947	ジャカルタの出版社「自由インドネシアの声」でインドネシア語誌の編集者
1947-49	オランダ政権下で逮捕、投獄
1951-52	ジャカルタの国営出版社「バライ・プスタカ」でインドネシア現代文学編集者
1959-60	スカルノ政権下で逮捕、投獄
1962-65	ジャカルタの日刊紙「ビンタン・ティモール」の文化欄「レンテラ」編集者
	レス・パブリカ大学講師としてインドネシア文学、歴史を教える
1965-79	スハルト政権の「新秩序」体制下で逮捕（ジャカルタとヌサカンバンガンに4年投獄、ブル島に10年流刑）
1978	日本ペンクラブ客員会員
1982	オーストラリア北ペンセンター客員会員
	スウェーデンペンセンター客員会員
1987	アメリカペンセンター客員会員
1988	アメリカペンセンターより執筆の自由賞
1989	スイスドイツ語ペンセンター会員
1992	イギリスペンセンター会員
1995	マグサイサイ賞
1996	ユネスコ、マダンジート・シン賞
1999	ミシガン大学名誉博士
	カリフォルニア大学バークレー校より名誉総長賞
	フランス政府より芸術勲章シュバリエ

主な作品

『追跡』（1950）　『ゲリラの家族』（1951）＊　『虐げられた者たち』（1951）
『ブロラ物語』（1953）　『汚職』（1954）　『インドネシアの華僑』（1959）
『ララサティ』（1960）　『浜の娘』（1962）
『私をカルティニとだけ呼びなさい』（1965）　『人間の大地』（1980）＊
『すべての民族の子』（1980）＊　『足跡』（1984）＊　『先駆者』（1985）
『ガラスの家』（1987）　『ある唖者の孤独のうた』第1巻、第2巻（1995-97）
『アロック・デデス』（1999）

［＊印のあるものは、邦訳あり（押川典昭訳、めこん刊）］

※40以上の小説および短編を執筆、世界で20以上の言語に翻訳されている

贈賞理由

プラムディヤ・アナンタ・トゥール氏は、民族の自立と人間の解放を鋭く世に問う作品を多く発表し、その作品の持つ影響力は国を超えて世界に及ぶ、まさにアジアを代表する作家である。

プラムディヤ氏は1925年中部ジャワのブロラに生まれ、民族主義者で教育者の父と愛情が深く自立的な母に強い影響を受けて育つ。17歳のころ単身ジャカルタへ行き、政治、経済、後の公用語となるインドネシア語などを学ぶとともに、多くの小説を読み、このころから文学に目覚め始める。その後出版社で編集者として働くかたわら、自己の作品を発表し始める。1945年のインドネシア独立宣言に始まる戦争のさなか、オランダ軍に逮捕、投獄されるが、その獄中で書いた小説『追跡』が、インドネシア内外で高く評価され、作家としての同氏の存在を世に知らしめるきっかけとなった。この後、『ゲリラの家族』『ブロラ物語』『虐げられた者たち』『汚職』『ブカシ河の畔で』などの初期作品をたて続けに発表する。

中国のプロレタリア文学の影響を受けたプラムディヤ氏は、1950年代後半から文学者の社会参加の運動を続けるが、1959年、華僑を扱った作品により逮捕、投獄され、さらに1965年の「9月30日事件」により三たび逮捕され、1979年最後の政治犯として釈放されるまで14年間の流刑生活をおくる。その流刑中に完成させていった代表作『人間の大地』『すべての民族の子』『足跡』『ガラスの家』の4部作は、流刑地の政治犯仲間への語りきかせから始まった。これらの作品は、オランダ植民地下の1898年から1918年のインドネシアを舞台とし、オランダ式の教育を受けたジャワ人である主人公が、植民地であるがゆえの圧制と現地の因習の呪縛という内外の二重の苦悩の中、次第に民族の自立に目覚めていくという壮大なスケールの歴史小説であり、インドネシア民族の自立と人間の解放を願う同氏の熱い思いがこめられている。

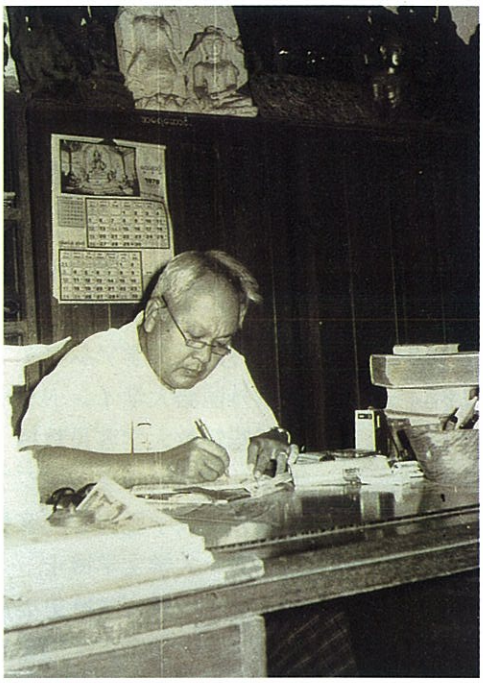
また、文学言語としてのインドネシア語の成熟度を高めるとともに、ナショナリズムの問題を秀逸な物語として読ませ、なおかつ世界文学のレベルにまで文学的完成度を高めたプラムディヤ氏の力量は驚異というほかはない。釈放後完成された同4部作すべてが発禁となり、現在もまだ公式には解除されておらず、インドネシアでは作品にふれる機会が制限されているが、同氏の作品は国内外で高く評価されている。

インドネシアでもいずれ同4部作の発禁が解かれると思われるが、プラムディヤ氏の作品は今後ともインドネシアのみならず世界の文学に大きな影響を与えていくものと高く評価でき、まさしく「福岡アジア文化賞－大賞」にふさわしい優れた業績といえる。

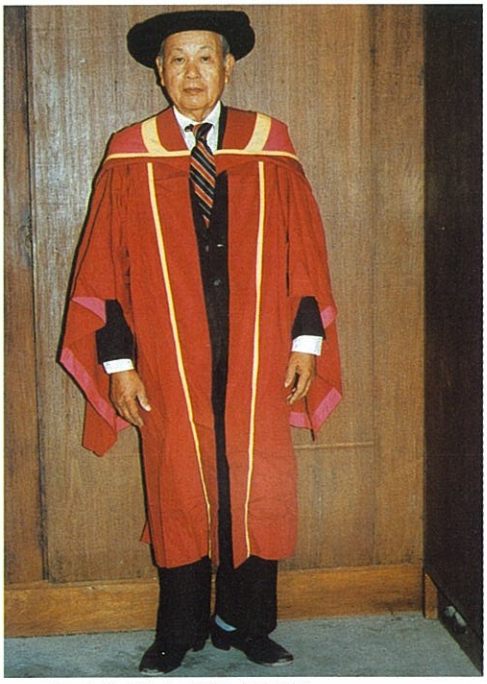
学術研究賞
ACADEMIC PRIZE

タン・トゥン	**Than Tun**
ヤンゴン大学名誉教授	**Emeritus Professor, University of Yangon**
１９２３年４月６日生	**Born April 6, 1923**
ミャンマー	**Myanmar**

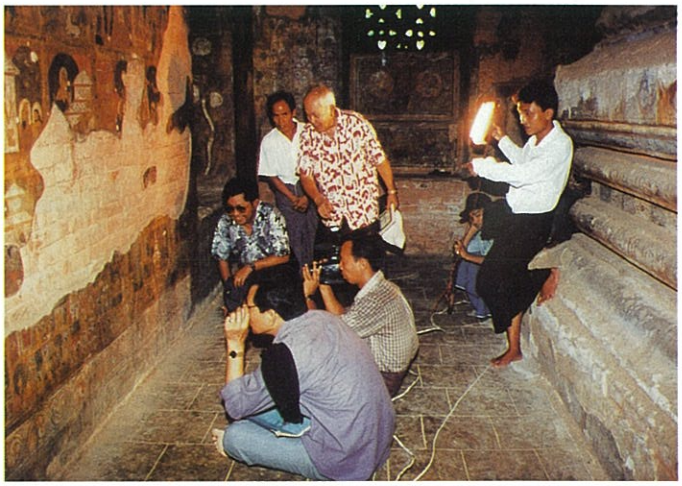
ヤンゴン大学で定例総会に出席しているタン・トゥン氏（1970年）
At the Conference of the Yangon University (1970)



ヤンゴン大学の研究室にて（1978年）
Professor Than Tun at his office of the Yangon University (1978)



ロンドン大学で博士号取得（1990年）
Professor Than Tun in Ph.D. gown of the University of London (1990)



バガン、ミンガバー・グー・ビャウッの壁画を記録する（1995年）
At work to record the wall paintings, Myingaba Gu Byauk, Bagan (1995)

略　歴

1923	エーヤーワディー管区パテイン市に生まれる
1950	ヤンゴン大学文学修士（歴史）
1952-56	ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院学術博士（中世ミャンマー史）
1958	ヤンゴン大学歴史・政治学部講師
1959-61	『バーマ・リサーチ・ソサエティ（ミャンマー研究協会）ジャーナル』編集員
1960-62	『バーマ・ヒストリカル・コミッション（ミャンマー歴史委員会）紀要』編集員
1960	大学委員会よりミャンマー・極東史学部のミャンマー史助教授に任命
1965-83	マンダレー大学歴史学部教授
1982	京都大学東南アジア研究センター客員研究員
1983	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所客員研究員
1984	東京外国語大学インドシナ語学科客員教授
1987	国際基督教大学客員教授
	北イリノイ大学東南アジア研究センター客員教授
	ミシガン大学歴史学部客員教授
1988	ロンドン大学文学博士
1991	ミャンマー教育省歴史委員会委員
1993	ヤンゴン大学考古学部名誉教授
1996	ヤンゴン大学歴史学部名誉教授

主な著書

『ミャンマー仏教史：1000-1300』ヤンゴン国民文学館，1962
ခေတ်ဟောင်းမြန်မာရာဇဝင် 『古ミャンマー史』マハーダゴン・サーペー出版，1964
နယ်လှည့်.ရာဇဝင် 『足で歩くミャンマー史』（第１－３巻）ナンダタイッ出版，1968-69
အသစ်မြင် ဗမာ့သမိုင်း 『ミャンマー史再考』ミャカンダ・サーペー出版，1975
『ミャンマー王の布告：1598-1885』（第１-10巻），京都大学東南アジア研究センター，京都，1983-90
『第２千年期の西洋・ミャンマー対照暦：17世紀』ヤンゴン大学歴史学部，1997

主な論文

「ミャンマー史：1300-1400」（『ミャンマー研究協会ジャーナル』第42号（２），1959，pp.119～134）
「ミャンマー史：1000-1300」（『ミャンマー歴史委員会紀要』第１号（１），1960，pp.39～57）
「バガン遺跡の復興」（『ミャンマー研究協会ジャーナル』第59号（１＆２），1976，pp.49～96）
「ミャンマーにおけるシュエジン派仏教僧団の歴史」（『史録』第14-18号，鹿児島大学，鹿児島，1981-85）
「ミャンマー史―人文科学的アプローチ」（『アジア研究動向：人文・社会科学レビュー』 No. ４，ユネスコ東アジア文化研究センター，東京，1994，pp.55～70）

※1989年６月以降、ミャンマーでは対外的な呼称を現地語に統一。上記国名・地名は、原則として、1989年６月以降の呼称を使用。
※出版地のないものは、すべてヤンゴンで出版。

贈賞理由

タン・トゥン氏は、ミャンマー（ビルマ）におけるそれまでの王朝礼賛に終始してきた王朝史観を批判して、厳密で実証的な歴史理論の構築を行うとともに、国内の歴史学研究を牽引し、ミャンマー史を塗り替える新境地を拓いた、アジアを代表する歴史学者のひとりである。

タン・トゥン氏は1923年にミャンマー東南部の港市パテイン市に生まれ、ヤンゴン大学に学び、その後ロンドン大学において碑文に基づくバガン朝研究で博士号を取得した。帰国後、教鞭をとるかたわら国内をくまなく自分の足で歩いて地方の写本等を収集し、史料批判研究などを積み上げてきた。

タン・トゥン氏は現在、教育省直属の歴史委員会委員であり、歴史学界の重鎮として、また前近代史の第一人者として活発な研究活動を行っている。同氏は数多くの業績をあげてきたが、特に国内外から評価が高い著作は、11～13世紀のバガン朝碑文を駆使した『ミャンマー仏教史』、『古ミャンマー史』であり、いずれも精魂を傾注して出版した労作である。さらに『ミャンマー王の布告』全10巻では、8年の歳月をかけて、現存する王朝時代の勅令関係写本を比較検討して厳密な史料批判を行った。この英文抄訳と解説、索引を付した7,600ページにおよぶ膨大な著作は、最も信頼のおける根本史料集であり、「タン・トゥン・テキスト」と命名される同氏の代表的な研究業績である。同氏の研究論文及び著作などこれらの研究成果は、ミャンマー人による自国史の解明という枠を超え、同国の歴史及び文化を世界史の文脈で位置づけるとともに、世界のミャンマー史研究を大きく発展させることに貢献した。

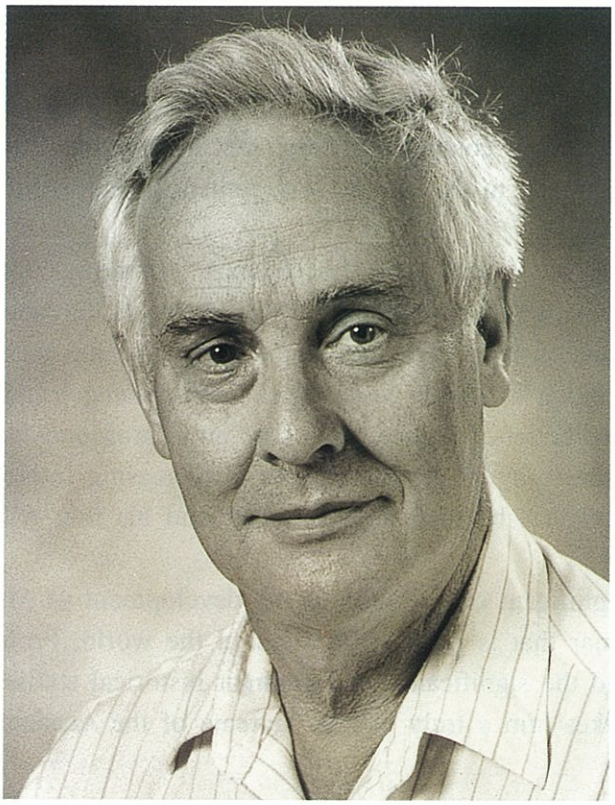
またタン・トゥン氏は、国を代表し数多くの国際学会や会議に参加してきた。同氏は来日の経験もあり、多くの日本人学生にミャンマー研究の醍醐味を伝えた知日派教授であり、さらにアメリカの大学院でも指導にあたるなど、国際派の学者であるとともに、信念を曲げない孤高の人であり、真にミャンマーが生んだ碩学である。現在ミャンマー研究の国際化が進む中で、同氏の研究成果を抜きにしてミャンマー研究は語り得ず、またその役割は今後一層重要になろうとしている。

このようにタン・トゥン氏は、ミャンマー歴史学及び世界のミャンマー研究の発展に大きな貢献を果たしたばかりでなく、ミャンマー人による歴史学研究の意義を広く世界へ示したと評価でき、まさしく「福岡アジア文化賞―学術研究賞」にふさわしいといえる。

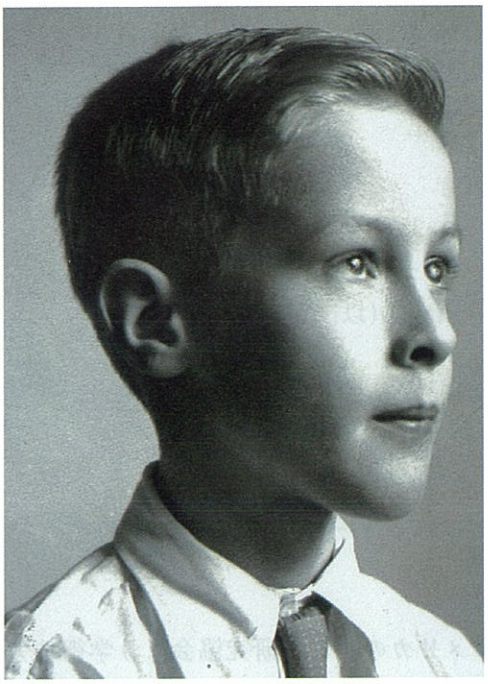
＊1989年6月以降、ミャンマーでは対外的な呼称を現地語に統一。上記国名・地名は、原則として、1989年6月以降の呼称を使用。

学術研究賞
ACADEMIC PRIZE

ベネディクト・アンダーソン	**Benedict ANDERSON**
コーネル大学教授	**Professor, Cornell University**
１９３６年８月２６日生	**Born August 26, 1936**
アイルランド	**Ireland**



写真撮影：チャールズ・ハリントン
Photo : Courtesy of Charles Harrington



10歳の時のアンダーソン氏
Professor Anderson at the age of 10

インドの歴史学者ロミラ・ターパル氏（第８回福岡アジア文化賞学術研究賞受賞者）と船上で（1993年、インド）
With Professor Romila Thapar (laureate of the International Academic Prize of the 8th Fukuoka Asian Culture Prizes 1997), historian of India on a river boat to Old Goa, India (1993)

コーネル大学芸術学部で開催されたインドネシアセミナーにて
アンダーソン氏（左端）（1958年）
At the Indonesian Seminar: Cornell University Arts Quadrangle, Professor Anderson (far left) (1958)

米国アジア研究協会の総会で学術功労賞を受賞するアンダーソン氏（右）（1998年、ワシントンDC）
Professor Anderson (right) accepts the Distinguished Lifetime Contributions Award for 1998 at the Association of Asian Studies (AAS) annual convention in Washington D.C. (1998)

略　歴

1936	中国雲南省昆明に生まれる
1957	ケンブリッジ大学卒業（古典）
1962-64	後期「指導される民主主義」下のインドネシアで博士論文のためのフィールドワークに従事
1966	学際的研究誌『インドネシア』創刊
1967	コーネル大学政治学博士 コーネル大学で教鞭
1971	インドネシア研究のためのグッゲンハイム・フェローシップを授与
1972	スハルト政権によりインドネシアへの入国を禁止される（以後26年間）
1973	タイの言語、文化、政治研究を開始
1978-80	インドネシアの人権侵害、東ティモール侵略についてアメリカ議会及び国連で証言
1983-88	コーネル大学東南アジア・プログラムディレクター
1988-	コーネル大学モダン・インドネシア・プロジェクトディレクター
1988	コーネル大学「国際研究」寄付講座、アーロン・L・ビネンコルブ記念講座教授 フィリピンの文化、政治研究を開始
1994	アメリカ芸術・科学アカデミー会員
1998	長年のアジア研究における学問的業績に対し、アメリカのアジア研究協会より学術功労賞 スハルト政権交代により、インドネシアへの入国を許可される

主な著作

『ジャワ人の神話と寛容性』コーネル・モダン・インドネシア・プロジェクト，1966

「ジャワ文化にみる権力観」（『インドネシアの文化と政治』クレア・ホルト編，コーネル大学出版，1972）

『革命時代のジャワ』コーネル大学出版，1972

『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』バーソ出版，ロンドン，1983（改訂版：ロンドン・ニューヨーク，1991）（白石隆・白石さや訳，リブロポート，東京，1987／〈増補〉白石さや・白石隆訳，NTT出版，東京，1997）

（アラビア語、ブルガリア語、中国語、オランダ語、フランス語、ドイツ語、ギリシャ語、ヘブライ語、インドネシア語、イタリア語、韓国語、ノルウェー語、セルビア・クロアチア語、スペイン語、スウェーデン語、トルコ語訳有り。アルバニア語、グルジア語、リトアニア語、ルーマニア語、ロシア語、スロベニア語訳は刊行予定）

『鏡の中に—アメリカ時代のシャムの文学と政治』ドゥアン・カモン出版，バンコク，1985

『言葉と権力—インドネシアの政治文化探求』コーネル大学出版，1990（中島成久訳，日本エディタースクール出版部，東京，1995）

『比較という亡霊—ナショナリズム、東南アジア、世界』バーソ出版，ロンドン，1998

※出版地のないものは、全てニューヨークにて出版

その他、上記記載言語及びタイ語、スロベニア語、ルーマニア語にて出版されている多くの作品有り

贈賞理由

ベネディクト・アンダーソン氏は、世界的に著名な政治学者、東南アジア地域研究者であり、活発な研究活動は、論文集のタイトル『言葉と権力』が示すように、文化と政治にまたがる独特な研究領域を開拓・発展させてきた。その知的影響力は、社会科学・人文科学の諸分野を越え国際的に大きな広がりを見せている。

アンダーソン氏は、ケンブリッジ大学でヨーロッパ古典語を修めたのちコーネル大学で博士号を取得したが、インドネシア独立革命のエスプリとその変容を描いた博士論文は『革命時代のジャワ』として出版されている。若くして創刊した学術誌『インドネシア』はインドネシアに関する学際的地域研究誌として国際的評価を確立している。

長年にわたりコーネル大学で教鞭を執り、研究・教育・出版組織としてのモダン・インドネシア・プロジェクト及び東南アジア・プログラムの運営・発展に尽力し、東南アジア研究の世界的中心としてのコーネル大学の地位を確固なものとした。インドネシア語のみならず、タイ語、タガログ語の習得に努め、地域言語を理解した上での比較地域研究の先駆者となった。スハルト政権下の人権侵害に対して批判的態度を表明し続けたように、自らの信念に基づき行動する知識人でもあるとともに、知的刺激に満ちた教師である同氏のもとからは、これまで国籍を問わず多くの研究者・教育者が育っている。

アンダーソン氏の国際的名声を不動なものとしたのは、これまでに世界17の言語に翻訳されている『想像の共同体』である。同氏はその中で、ナショナリズムの起源を世界史的過程のなかに位置づけ、「イメージとして心に描かれた想像の共同体」にすぎない「国民」（ネーション）が、きわめて多様な社会的、政治的、イデオロギー的パターン（「ナショナリズム」）と合体しながら、様々な「国家」において接合・変形されていく過程を比較歴史的に分析している。その分析手法と洞察力は、ナショナリズム研究に新局面を拓いたものとして国際的に高く評価されている。冷戦の終焉やグローバリゼーションの波の拡大に伴う「国家」の概念の見直しにあたり、国民国家の批判的検証を試みたこの著作がもつ意義はますます大きい。その後の同氏のナショナリズムについての論考は、『比較という亡霊』にまとめられている。

このように、東南アジア、特にインドネシア研究において多大な学術的・教育的足跡を印し、さらには文化と政治に関する研究、ナショナリズム研究において卓越した業績を残し、これらの分野で第一人者として学界を先導するアンダーソン氏は、「福岡アジア文化賞―学術研究賞」の受賞者として真にふさわしいといえる。

芸術・文化賞
ARTS AND CULTURE PRIZE

ハムザ・アワン・アマット	**Hamzah Awang Amat**
ダラン（影絵人形遣い）	**Dalang Wayang Kulit (Shadow Play Master)**
１９４０年生	**Born in 1940**
マレーシア	**Malaysia**

父（右）とともに楽器“チャナン”を演奏
Playing the 'canang' with his father (right)

第１回国家芸術賞授賞式にて家族と（1993年）
With his family at the National Arts Award occasion (1993)

精霊に祈りを捧げる儀式“ベルジャム”を行うハムザ氏（1994年）
The performance of 'BERJAMU' (1994)

ワヤン・クリットの上演
Mr. Hamzah performing wayang kulit

略　歴

1940	クランタン州トゥンパット、クバカット村に生まれる
1949-55	クランタン州トゥンパットのスンガイ・ペナン小学校にて初等教育
1951	小学校で影絵人形芝居を演じ始める
1952-59	ダランの父親に影絵人形芝居を学ぶ
1959-	影絵人形芝居団「クンプラン・スリ・スティア」を結成し、公演活動を開始
1959-62	ダランのオマー・ユヌス氏に学ぶ
1962-68	ダランのアワン・ラー・パンダク氏に学ぶ
1974	アブドゥル・ハリム・ムアザム・シャ国王よりピンガ・パンクアン・ネガラ勲章
1977-95	マレーシア科学大学客員講師として伝統文化と影絵人形芝居を教える
1978	クランタンのスルタンよりピンガ・バクティ勲章
1989	アズラン・シャ国王よりピンガ・パンクアン・ネガラ勲章
1993	シンガポール、ナショナル・アーツ・カウンシルの招聘で劇団「シアターワークス」の講師をつとめる
	マレーシア文化・芸術・観光省より国家芸術賞
1994-	国立芸術アカデミー客員講師
1994	パキスタン政府より芸術家賞
1998	ジャファール国王よりピンガ・アリ・マンク・ネガラ勲章
	インドネシア政府よりアセアン文化・情報賞

主な公演

1956-59	トレンガヌ、パハン、ペナン、クアラルンプールのマレーシア各地で公演
1969	マラヤ大学において国立博物館主催プログラムにより公演
1971	ユネスコ及びマレーシア文化・青年・スポーツ省主催プログラムによりヨーロッパ及びアフリカの10か国、31都市で公演
1973	ソ連、トルコで公演
1974	アメリカ、ベルギー、カナダ、イギリスで公演
1975	ミャンマーで公演
1977	香港で公演
1990	フランス、イタリアで公演
1993	シンガポールで公演

贈賞理由

ハムザ・アワン・アマット氏はマレーシアにおける影絵人形芝居「ワヤン・クリット」の巨匠といえよう。マレー半島に伝承される影絵人形芝居の伝統を継承しつつ、新たな創作や改良を加え、支持層を拡大し、国際的にも高く評価されている。

ハムザ氏は1940年、マレー半島東岸部、伝統文化が息づくクランタン州クバカット村に生まれ、幼い頃より影絵人形芝居のダラン（影絵人形遣い）である父親から薫陶を受け、ダランになることを志していた。1959年にダランのオマー・ユヌス氏一座の楽器奏者として本格的な影絵人形芝居の活動に加わる一方、伝統音楽のグループ、クンプラン・スリ・スティアを組織して公演活動を始め、これをもとに影絵人形芝居団へと発展させていった。その後、クランタンの伝統を継承する代表的なダラン、アワン・ラー・パンダク氏のもとで、影絵人形芝居の神髄ともいえる語りを学び、演じ手であり、また演出家でもあるダランとしての才能を飛躍的に高めていくこととなった。

マレーシア・クランタンの影絵人形芝居は、カンボジアを源としてタイ南部から伝えられ、演目においては、インドネシアやタイ、カンボジアのものとも共通するインド古代叙事詩ラーマーヤナなどを素材とするが、そのマレーシア版ともいえるヒカヤット・スリ・ラマの物語が軸として演じられ、独自の表現形式や異なる楽器編成をもっている。ハムザ氏はこのマレーシアの貴重な伝統芸能の存在と真価をあらためて世に知らしめるとともに、その地位を高めることに貢献してきた。マレーシア政府によりその活動を評価された同氏は、1971年、ヨーロッパ、アフリカの10か国に派遣され、これをきっかけとして、以後、欧米やアジア地域からの招聘、派遣は数次に及び、国際的な評価の地歩を確立していった。このようなマレーシアの影絵人形芝居における同氏の多大な功績に対し、1993年に創設された第一回の国家芸術賞が贈られている。

さらに、ハムザ氏は旧来の影絵人形芝居の師弟制度にとらわれず、多くの人に門戸を開いた機能的な教授法や学習法を確立させるなど、積極的に後進の育成に尽力している。1977年から18年にわたりマレーシア科学大学で客員講師をつとめるとともに、現在は国家芸術賞の受賞者として国立芸術アカデミーの客員講師に招かれ、研究者や学生の指導にあたっている。

影絵人形芝居をマレーシアの貴重な無形文化財として、また国際的に高く評価される芸術として発展させたハムザ氏の功績は大きく、まさに「福岡アジア文化賞ー芸術・文化賞」にふさわしいといえよう。

公式行事スケジュール

行　　事	日　　時	場　　所
○記　者　会　見	9月14日（木） 午後3時～4時	ホテル日航福岡
○市民フォーラム		
・現代アジア研究セミナー 「言語・メディア・国民意識－アイデンティティの行方」	9月15日（金・祝） 午後1時～3時30分	福岡市役所15階講堂
・アジア文学セミナー 「プラムディヤが語るインドネシア、そして日本」	9月15日（金・祝） 午後4時～6時30分	あいれふホール
・アジア歴史セミナー 「バガン王朝の栄光」	9月16日（土） 午後3時～5時30分	福岡市役所15階講堂
・マレーシア影絵人形芝居公演 「光と影が織りなすワヤン」	9月16日（土） 午後6時～8時	アクロス福岡イベントホール
○受賞者フォーラム 「アジア 激動の世紀」	9月17日（日） 午後1時30分～3時30分	アクロス福岡イベントホール
○授　賞　式	9月18日（月） 午後2時～3時30分	アクロス福岡シンフォニーホール
○祝　賀　会	9月18日（月） 午後5時～6時30分	ホテル日航福岡
○学　校　訪　問	9月16日（土）	
	午前10時10分～午後0時 （芸術・文化賞受賞者 ハムザ・アワン・アマット氏と同行公演団）	横手中学校
	午前11時10分～午後0時45分 （大賞受賞者　プラムディヤ・アナンタ・トゥール氏）	福岡西陵高校
	9月19日（火）	
	午前11時10分～午後1時 （学術研究賞受賞者　タン・トゥン氏）	福岡女子高校
	午後1時30分～3時20分 （学術研究賞受賞者　ベネディクト・アンダーソン氏）	中村学園三陽高校

授　賞　式

日　時：9月18日（月）午後2時～3時30分
会　場：アクロス福岡シンフォニーホール

2000年（第11回）福岡アジア文化賞授賞式は、受賞国大使館関係者をはじめ、留学生、国際交流団体、経済団体、大学や地域団体の代表者及び市民などを含め約850名の参加を得て、福岡サロンオーケストラによる演奏の中、厳かにスタートした。

福岡アジア文化賞の創設の経緯を説明後、今回の受賞者のプロフィールや受賞にいたったこれまでの研究・芸術・文化活動の一端をビデオで紹介し、その業績を讃えた。その後、ステージでは主催者挨拶、来賓による祝辞、選考経過報告と続き、主催者により賞の贈呈が行われた。4名の受賞者は受賞後のスピーチで喜びを表し、福岡市民や福岡に対するメッセージなどを語った。

特別公演として、芸術・文化賞受賞者ハムザ・アワン・アマット氏及び同行公演団によるマレーシア影絵人形芝居が披露され、式典にいろどりを添えた。

受賞者挨拶

プラムディヤ・アナンタ・トゥール

福岡市長　山崎広太郎様、財団法人よかトピア記念国際財団理事長　川合辰雄様、福岡アジア文化賞委員会の皆様、そしてここに御参加の全ての皆様、今回、福岡アジア文化賞という栄誉を賜りましたことは、私にとりまして、日本と私個人の関係に新たな１ページを記すものであります。私は1942年から1945年にかけて日本がインドネシアを占領していた時期に成人となりました。その歴史をとおして決して揺らぐことはないと思われた西洋の植民地支配に対して、行動をもって勇敢に立ち向かっていくことを、行動力の国日本がインドネシア国民に教えていくさまを、そのとき私は目のあたりにしたのでした。インドネシア共和国の初代大統領であったスカルノは、独立を指導し国家を建設していくに当たって、その政治宣言において３つの原則をうち立てることを説きました。すなわち、第１の原則：政治的に主権をもつこと、第２の原則：経済的に自立すること、第３の原則：文化的に独自性をもつこと、この発想の源がどこにあったかは容易に推測できます。日本です。

３つの原則を実現するために、インドネシアはまだまだ日本から学ぶべきことがたくさんあります。そして私は、この行動の国民が、様々な分野での共同事業において、また自然災害のような緊急時において、常にインドネシアに手をさしのべてくれたように、これからも力になってくれるものと確信しております。

いま私は、日本から、福岡アジア文化賞委員会から、この賞を頂くために、ここにおります。スカルノの掲げた３つの原則にからめていえば、私がこの大きな賞を頂いたことも、決して偶然ではありません。というのも、日本は３原則のインスピレーションの源であり、この受賞は「文化的に独自性をもつこと」という３つ目の原則の正しさを立証するものだからです。

この３つ目の原則とのかかわりでいえば、今日、文化を通じた国際関係が重要になってきています。新たなミレニアムを迎えて、世界の人口は増加の一方を辿り、人間の生活空間はますます狭くなり、その結果、民族的な違いの一つ一つが対立の、さらには大量虐殺の口実にされてしまいます。

文化的に独自性をもつこととは、何よりもまず、人間的な権利と義務をもった人間として独自性をもつことであり、それが人間相互の、また民族相互の関係を真に人間的なものにするのです。

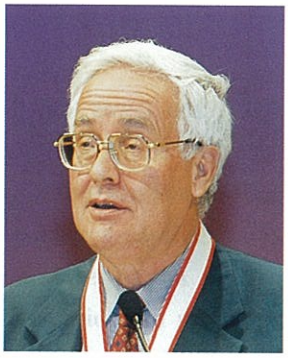
本日このような栄誉を賜りましたことに心より御礼申し上げます。

ありがとうございました。

タン・トゥン

「2000年（第11回）福岡アジア文化賞の受賞者に選ばれた」と聞いてまったく驚きませんでした。というのも私が研究するのは賞をもらうためでもなければお金をかせぐためでもなく、自分が選んだ研究分野で知識を広げることが出来るという満足感を求めてのことだからです。仏教では、富のような幸運をもたらしてくれるのは前世におけるカンマ（善い行い）の結果だという功徳の教えがあります。健康であるということもカンマにつながります。しかしカンマが全てというわけではありません。ニャーナ（知恵）やウィリヤ（勤勉）があって初めて幸運が訪れるのです。私は今回の受賞は幸運だと思いますが、その中にもやはり自分で立てた目標や志がこの運と相まったものでしょう。私は中世ミャンマー史を中心に研究し、とりわけ文化を専門としてきました。私が過去45年にわたって行った研究で初期のミャンマー史に関する知識はかなりの程度、深められたと信じます。私は研究素材に石に刻まれた碑文を使ったり、ヤシの葉に文字を書いた貝葉（バイヨウ）写本やパラパイと呼ばれる粗雑な紙に書かれた折りたたみ写本を使います。これらのほとんどは、町から遠く離れた寺院の書庫で人目にふれることなく眠っています。私はこういった碑文や写本を求めて、国中を旅してまわりました。内容を解読するのも大変な仕事です。解読しえたとしても、新たな解釈や情報をもとに歴史を書き換えるのにさらにまた時間がかかりました。出版社は、私が行ってきたような研究の類を印刷しようとはしません。ですから、今回、福岡アジア文化賞でいただく賞金で、私はこれから恐らく20年間は自分の研究を続けることができるでしょう。

ありがとうございました。



ベネディクト・アンダーソン

福岡アジア文化賞委員会とアジアへの玄関口として長い歴史を持つ福岡市民の皆様に対し、今年の福岡アジア文化賞学術研究賞の受賞という栄誉をいただきましたことを心より御礼申し上げます。私の尊敬する同僚の多くがこの賞を受けておりますが、今年は私にとりましてことさら特別な年になりました。天才作家であり勇気と信念を持ったプラムディヤ・アナンタ・トゥール氏に大賞が贈られるからです。彼はこれまでずっと私の研究の道しるべとなってくれた人物です。

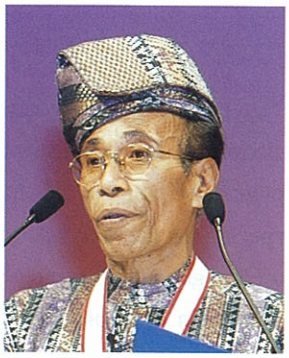
同時に私は、子どもの頃からの英雄で、古代中国科学の偉業解明にその生涯を費やした学術研究者であるジョゼフ・ニーダム博士に次いで、本賞を受賞する２人目のヨーロッパ人であることを大変うれしく思います。ニーダム博士の生涯に、私たちは、真に優れた非アジア人のアジア文化研究者が、アジアの独特の言語を研究の窓口として、どれほどアジアの文化に魅了され、アジアの文化に大きく影響されたかを見ることができるのです。

しかし、言語は決して一言語だけで独立したものでなく、相互に浸透し、変わっていくものです。私が学術の道を歩み始めたのは、インドネシア語の研究からでした。研究を続けるうちに自分がインドネシア語に魅了され、そこからオランダ語、ジャワ語の研究に足を踏み入れることになり、更にタイ語、タガログ語、スペイン語へと広がっていきました。そのどれもが独自の豊かさを備えた言語なのです。

アジアには共通点もありますが、私にとって一番おもしろいのは、アジアがどれほど違うかという点です。言語、親族関係、道徳的考え、美的価値観等大きく違います。ですから、個々の伝統をより深く理解し称賛するには、比較することが不可欠だと強く思うのです。

最後に、福岡アジア文化賞委員会、並びに福岡市民の皆様、異なる文化を背景に持つ芸術家や学術研究家を顕彰するという形で、皆様は物事を比較して考える絶好の機会を提供しておられます。私はこの席に同席できたことを大変光栄に思います。そして、皆様のお陰で、私のインドネシア人の息子ベニーも私と共に福岡に来ることができました。

ありがとうございました。



ハムザ・アワン・アマット

こんにちは

愛は人の振る舞いを豊かにしてくれます。愛は心を素直にしてくれます。愛は善意の心や感謝の気持ちを育ててくれます。愛がなければ誰も生きていくことができません。愛は永遠です。愛があるから強くなれます。愛は芸術であり、芸術は心優しいものです。芸術には、私たちの魂を揺さぶる精神があり、その魂をワヤン（影）と呼びます。ワヤンは私たちの身体そのもので、抵抗したりもっと自分自身を知ろうとするものです。ワヤンは自分の真の告白であり、誰もが自分の中にワヤンを持っています。ワヤンは現実の中の真実ですので、ワヤンがなければ、私たちはこの世に存在しません。

ワヤン・クリット（影絵人形芝居）では、ダランによって物語が語り始められます。物語は、クリル（スクリーン）に影絵芝居として展開されますから、スクリーンの上でワヤンの世界が演じられるわけです。ダランはワヤン・クリットの芸術を知り尽くしているという理由で支配者と言えます。すべての動きを作り、善と悪を描き、リズムとメロディーを作り出します。大きなうねりとなってワヤンの世界に流れる音楽の指揮も自分で行うのです。これこそが真実を求めて動く魂に他なりません。真実を追求する中で、より完璧を求め、更なる心の安定と調和を求めて葛藤があるのです。魂は現実の後ろで見え隠れし、怠慢の心を消してくれるものです。

これがワヤン・クリットの世界です。ただ単に乾いた一枚の革ではありません。その中に真実が隠されているのです。

ワヤンの真実や愛の話はさておき、クランタンの伝統演劇ワヤン・クリットに対する私のこれまでの活動を認めていただいた福岡アジア文化賞委員会に対し、感謝の気持ちを述べたいと思います。私は、影絵芝居の上演を通してその中に隠された真実を見つける糸口となるよう、ワヤン・クリットに登場する様々な人形にできるだけ人格を与えようと試みました。目には見えず、物事の奥に隠されているメッセージを身体の動きで伝えることは容易ではありません。ワヤン・クリットの世界で繰り広げられる数々の問題は、人々が本当に理解することが難しいがために生まれてきたのです。

ワヤン・クリットは、実際には私たちの心を映し出すものですから、ワヤン・クリット自体が哲学を持っています。奥底の深い知識と理解なくして、人がワヤン・クリットの物語の奥に隠されたメッセージを理解するのは非常に難しいことです。隠れたメッセージを理解することから愛がはぐくまれ、美が開花し始め、そしてその美は、ワヤン・クリットの世界が実際に私たちの心の内にある現実を表すが故に控えめなのです。

福岡アジア文化賞委員会のみなさまに再度、ワヤン・クリットの世界における私の業績を認めていただいたことに厚く御礼申し上げます。

受賞者フォーラム

日　時：９月17日（日）午後１時30分～３時30分
会　場：アクロス福岡イベントホール
参加者：約300名

１　テーマ　「アジア 激動の世紀」
２　出演者　大賞受賞者　プラムディヤ・アナンタ・トゥール
学術研究賞受賞者　タン・トゥン
学術研究賞受賞者　ベネディクト・アンダーソン
芸術・文化賞受賞者　ハムザ・アワン・アマット
コーディネーター：中部大学教授　小倉　貞男
３　概　要

４名の受賞者が人生について語り合う受賞者フォーラムも、今年で３回目。まず、現在の仕事に至るきっかけを得た少年・青年時代から４名の激動の人生が語られた。中国・雲南省生まれで中国の生活様式に親しむ一方、様々な言語・文学になじんでいたために、自然とアジアの言語にも関心を広げることができたというアンダーソン氏。「良き仏教徒として生きよ」という両親の教えを受け、10代にはイギリスからの独立を求める気運の中で成長したタン・トゥン氏。ダラン（影絵人形遣い）であった父から教えを受け、影絵人形芝居に幼いころから興味をもち、師のもとで研鑽を積んだ後、国際的に高い評価を受けてきたハムザ氏。両親から反植民地主義的思想を受け継ぎ、母の「自分自身の主人でありなさい」という言葉を今でもモットーとするプラムディヤ氏。

「アジアの文化は固有なものか、交流によって作られるものか」という議論の中で、タン・トゥン氏は、バガン文化、ミャンマー文化の事例から文化交流の重要性を指摘し、ハムザ氏はワヤン・クリットの核となるイスラム教、その哲学について語り、文化における伝統の重要性を主張した。アンダーソン氏は新しいナショナリズム、ひいてはナショナル・カルチャーを作り出していくための若者の役割の重要性を強調し、プラムディヤ氏は「インドネシア人」になるためにはインドネシア語を使い、新しい文化を創造することが重要であると述べ、多様性の中でのアジアの文化のあり方について語った。

また、若者たちへのメッセージとして、アンダーソン氏は「自分が未来に対し何ができるかは、自分が前の世代から受け継いできたものにかかっている」、ハムザ氏は「いろんな文化があるが、それが正しいか、美しいか、またどういう道を行くべきか自分で判断することが必要だ」と述べた。タン・トゥン氏は、ミャンマーで知られる年輩者から若者への教え「私のマネをするな。私の命令をきけ」（年輩者がしている行動をただまねるのではなく、年輩者が命じる正しい行動をしてほしい）を紹介した。青年時代の多くを獄中で過ごしたプラムディヤ氏からは、「若者が将来希望をかなえられるかどうかは今現在の努力にかかっている。今の世代よりも良い世界を作ることが若者の責務だ」と語った。

最後に、小倉氏が「今後重要なのは地域社会同士、人間同士の交流であり人間対人間を介した文化のネットワーキングである。21世紀はあらゆる人が国という壁をこえて平和を追求する時代であってほしい」と述べ、このフォーラムを締めくくった。

アジア文学セミナー

日　時：9月15日（金・祝）午後4時～6時30分
会　場：あいれふホール（あいれふ10階）
参加者：約200名

1　テーマ　　「プラムディヤが語るインドネシア、そして日本」
2　プラグラム
　趣旨説明　　文芸評論家、法政大学教授　　川村　湊
　基調講演　　福岡アジア文化賞大賞受賞者　　プラムディヤ・アナンタ・トゥール
　パネルディスカッション
　　パネリスト　　プラムディヤ・アナンタ・トゥール
　　早稲田大学アジア太平洋研究センター教授　後藤　乾一
　　コーディネーター　　川村　湊
3　概　要

このフォーラムは、数々の弾圧にも屈せずインドネシア民族の自立と人間の解放を訴え続けてきたプラムディヤ氏が、日本の聴衆に向けて初めて肉声で語りかける貴重な機会となった。川村氏は、「インドネシアのみならずアジア、世界の文学を代表する小説家であるプラムディヤ氏のお話が、インドネシアおよびアジアの文学を知るきっかけになれば」と会場に呼びかけた。

プラムディヤ氏は、「子供のころから思い入れをもってきた日本に来ることができて感激している」という言葉で基調講演を始めた。大恐慌時にも入手可能な安価な商品の輸出元として、また後に軍国主義へと傾いていくとは予想もしなかった「新しい為政者」として、少年期から青年期にかけて日本のことをずっと考えていたという。しかし、一方で日本による占領時代は、皆が飢えに苦しみ、非常に苦しい時代だった。そのような苦しい日本軍政時代に耐えることを通して、「アジアは植民地状態から抜け出すことができる」という考えが生まれたと語った。

続いて後藤氏が、プラムディヤ氏のこれまでの生涯を、インドネシアおよびアジアの近代史、特にインドネシアでスカルノをリーダーに擁する民族主義運動が急速に発展した1920年代後半、および3年半に及ぶ苛酷な軍政時代の中に位置づけながらコメントを寄せた。

会場からは、日本について、あるいは氏の文学について様々な質問が寄せられたが、その中にはインドネシア語による質問も含まれていた。「インドネシアの現在のモラル及び経済における危機について日本からどんなことが学べるか」という質問にプラムディヤ氏は、日本から学ぶべきことは政治・経済・文化などの面で自立するということだが、日本とインドネシアが人間的価値を向上させる密な関係をもって互いに認め合わなければ、交流が生まれず、何も学ぶことができないと語った。

プラムディヤ氏の肉声を通してその生き方・人間的魅力にふれ、インドネシアと日本の関係について考えさせられるセミナーとなった。

プラムディヤ・アナンタ・トゥール氏
Mr. Pramoedya Ananta Toer

後藤乾一氏
Professor Goto Kenichi

川村　湊氏
Professor Kawamura Minato

アジア歴史セミナー

日　時：9月16日（土）午後3時～5時30分
会　場：福岡市役所15階講堂
参加者：約200名

1　テーマ　　「バガン王朝の栄光」
2　プログラム
　趣旨説明　東京外国語大学教授　奥平　龍二
　基調講演　福岡アジア文化賞学術研究賞受賞者　タン・トゥン
　パネルディスカッション
　　パネリスト　タン・トゥン
　　東京外国語大学教授　斎藤　照子
　　愛知大学教授　伊東　利勝
　　コーディネーター　奥平　龍二
3　概　要

世界三大仏教遺跡の一つに数えられ、二千を超える寺院・仏塔群が往時の繁栄を物語るバガン王朝に関するセミナーということもあり、多くの熱心な市民が参加した。

奥平氏は基調講演に先立ち、「王朝史中心の歴史研究から実証的研究へ、ミャンマー史を塗り替える仕事をされてきたタン・トゥン氏抜きにはミャンマー研究は考えられない」と氏の業績を称え、続いてスライドを交えて11～13世紀に繁栄したバガン王朝の遺跡を紹介した。

基調講演でタン・トゥン氏は、寺院に残された碑文の解読によって実証的に得られたデータを示し、バガン王朝の社会、宗教、人々の暮らしを解き明かしていった。バガン朝は、11～12世紀にかけて現在のスリランカから三蔵聖典全巻を入手し、それらがミャンマー語に翻訳された。そして、窟院には民衆の教化のために仏陀の本生譚であるジャータカ物語や仏伝を題材とした装飾壁画が描かれた。それらの壁画からバガンの人々の暮らしや祭りを知ることができるという。また、寺院の外側は精巧な彫像によって装飾されているが、そうした寺院の修復が、オリジナルの姿の保存・復元よりも現在の様式に基づいて行なわれているため、それが地震で破壊された以上にバガンの遺跡を破壊してしまうのではないかと、タン・トゥン氏は憂慮する。

斎藤氏は、タン・トゥン氏の仕事は地道な研究の積み重ねの大切さを教えている。氏の実証的研究により、港市国家に比べ自閉的だと考えられてきた内陸国家バガンが、実は活発な対外交流を通し多様な言語・文化・技術を受け入れつつ統合させるシステムによって文化的繁栄を獲得していたことが明らかになったと指摘した。また、伊東氏は、寺院への寄進を記録した碑文を様々な角度から読むことによって明らかにしたタン・トゥン氏の研究が、バガン時代の社会や経済のみならず、後代や他地域の歴史をも塗り替えたことを指摘した。

最後に、奥平氏が「タン・トゥン氏の原史料による厳密な考証は、王朝史にとどまらずバガンの全体史を明らかにするものであり、ミャンマーの歴史研究のための確かな方法論を提示した」と述べ、このセミナーのまとめとした。

タン・トゥン氏
Professor Than Tun

斎藤照子氏
Professor Saito Teruko

伊東利勝氏
Professor Ito Toshikatsu

奥平龍二氏
Professor Okudaira Ryuji

現代アジア研究セミナー

日　時：９月15日（金・祝）午後１時～３時30分
会　場：福岡市役所15階講堂
参加者：約240名

１　テーマ　　「言語・メディア・国民意識－アイデンティティの行方」
２　プログラム
　　趣旨説明　　京都大学東南アジア研究センター教授　　白石　隆
　　基調講演　　福岡アジア文化賞学術研究賞受賞者　　ベネディクト・アンダーソン
　　パネルディスカッション
　　パネリスト　　ベネディクト・アンダーソン
　　東京大学社会情報研究所教授　　姜　尚中
　　九州大学大学院比較社会文化研究院教授　　清水　展
　　コーディネーター　　白石　隆
３　概　要

アンダーソン氏の基調講演に先立ち、白石氏は、過去10年間の世界の大きな変化には（１）アメリカが唯一の超大国となった、（２）英語が世界語となった、（３）IT革命の進展によりグローバル化が進んでいる、（４）国家が国民の生活をかつてほどコントロールできない／しない、という４つの傾向があるが、それに伴い「我々とは誰か」の想像の仕方はどう変わっているのか、という問題を提起した。

アンダーソン氏は基調講演の冒頭で靖国神社の戦争記念館を訪問した時の印象を語り、そこに展示されている手紙など私的なものでさえも、ナショナルアイデンティティ付与の視点で選別されたものであり、それらの展示物は見る者のナショナルアイデンティティを強化していること、それは氏の予想通り欧米やアジアで訪れた同種の記念館と大差なかったことを紹介し、言語やメディアがナショナルアイデンティティの問題を考える上でいかに重要かというテーマのポイントを明確に示した。そして国民という「想像の共同体」形成における印刷メディアの役割について、印刷メディアの歴史的推移や各民族・地域の言語のあり方などに言及しながら明らかにした。最後に、先に提起された４つの傾向とナショナルアイデンティティ形成の行方についての考えを示し、今後は豊かな国への移民労働者がさらに増大し、受け入れ側と移民側の双方が自らのナショナルアイデンティティを守りたいと望むことにより様々な問題が生じるが、民主的な多民族主義が解決を導くのではないのかとの考えを示した。

基調講演を受けて、姜氏は日本の植民地主義を公定ナショナリズムの視点から考え直す傾向について、清水氏は文化の雑種性を排除しようとした日本と異なりフィリピンがそれをナショナルアイデンティティの根幹にしたことについてそれぞれ指摘した。

会場からは、国民国家の枠を越えたアイデンティティのあり方に注目するもの、今後多くの移民労働者を受け入れる可能性のある日本社会のあり方や、将来の世界的政治経済の担い手に関する数多くの質問・意見が寄せられた。

最後に白石氏が、「言語と同様に社会も他からのエネルギーを受け入れることでより豊かになる。これからは社会を支えているのは誰かという視点から社会のあり方を考えていかねばならない」と述べ、このセミナーを締めくくった。

ベネディクト・アンダーソン氏
Professor Benedict Anderson

姜　尚中氏
Professor Kang Sung-jung

清水　展氏
Professor Shimizu Hiromu

白石　隆氏
Professor Shiraishi Takashi

マレーシア影絵人形芝居公演

日　時：９月16日（土）午後６時～８時
場　所：アクロス福岡イベントホール
参加者：約600名

1　テーマ　　「光と影が織りなすワヤン」
2　プログラム
　趣旨説明　　中部高等学術研究所副所長　　藤井　知昭
　マレーシア影絵人形芝居の実演と解説
　　実演　語りと人形操り　福岡アジア文化賞芸術・文化賞受賞者　ハムザ・アワン・アマット
　　楽器演奏　　同行公演団　６人
　　解説　ハムザ・アワン・アマット
　　藤井　知昭
3　概　要

マレーシアの影絵人形芝居「ワヤン・クリット」の巨匠ハムザ氏初来日の公演に、多くの市民が来場し、満席となった会場は開演前から大きな期待に包まれた。

ダラン（人形遣い）であるハムザ氏の合図で、笛・太鼓が鳴り響き、華々しく演奏が始まると、たちまち観客は壮大な物語の世界に引き込まれていった。

その夜の公演では、インド古代叙事詩「ラーマーヤナ」のマレーシア版「ヒカヤット・スリラマ」いわゆる英雄スリラマ王子の冒険物語からの一場面が演じられた。主人公スリラマが、美しく賢い姫シティデウィをめぐるコンテストに参加し、１本の矢で40本のヤシの木を射抜くという難題に挑戦する。そして、弟ラクスマナの助言を得、挑戦者の中でただ一人シティデウィと結婚する資格を勝ち取る。その後、スリラマは彼女を伴い、弟とともに自分の国へ帰るため旅立つ。ところが、敗れたにもかかわらず、シティデウィを妻にしたいと切望する魔王ワナがその旅の途上に現れ、悪知恵の限りを尽くしてとうとう彼女を誘拐して飛び去ってしまう。

ハムザ氏は登場するすべての人形を一人で操るだけでなく、物語を語り、同時に楽器演奏者への指示も出す。その巧みな声色は、ときに英雄となり、ときに美しい姫となり、ときに魔王や道化たちへと千変万化の妙を見せる。奏でられる曲も物語に彩りを添え、人物や場面にあわせ、激しく勇壮な調べから、ゆったりとした調子まで自在に変化する。スクリーンに次々に映し出される色鮮やかな人形の動きに観客の目は釘付けとなり、同氏の語りや歌、独特の音色の音楽が会場を魅了しつづけた。

芝居が終わり、同氏がスクリーンの裏側での自らの人形操作やそれぞれの楽器、演奏のもようなどを紹介すると、その人形操作の巧みさや伝統楽器の音色の美しさに、会場は驚きと歓声に包まれた。

ワヤン・クリットは単なる人形芝居ではなく、その話の中には人間の表裏が織り込まれており、「哲学」でもあると語るハムザ氏による公演は、大きな感動のうちに幕を閉じた。

スクリーンに映し出された影絵人形
Shadow puppets reflected on the screen

影絵人形芝居の上演
Wayang kulit performance

学校訪問

＜横手中学校＞

日　時：９月16日（土）午前10時10分～午後０時

ハムザ・アワン・アマット氏と同行公演団員が訪れ、１年生約180人との交流が行われた。

氏は人形遣いを志したきっかけやその魅力などを語り、影絵人形芝居を披露。氏の語りやスクリーンに映し出された色鮮やかな人形の動き、伝統楽器の音色に生徒たちからは驚きと興奮の声があがった。また、生徒数名が人形の操作や楽器の演奏を体験するなど、終始にぎやかに行われた。

＜福岡西陵高校＞

日　時：９月16日（土）　午前11時10分～午後０時45分

プラムディヤ・アナンタ・トゥール氏は、生徒約800名を前に講演を行った。

講演に先立ち、氏の作品の翻訳を多く手がけている大東文化大学教授の押川典昭氏が、インドネシアや氏の文学について解説を行った。氏の人生について語られた講演後、生徒代表数名が壇上に上がり、青年時代のこと、文学や人生観、日本の印象などについて様々な質問を投げかけたりと、活気に満ちた交流が行われた。

＜福岡女子高校＞

日　時：９月19日（月）　午前11時10分～午後１時

タン・トゥン氏は国際教養科の生徒約80名に向けて講演を行った。

氏は、日本に10年ほど滞在していた経験を踏まえ、「ミャンマーと日本」について様々な分野を独自の視点で語った。講演後は、生徒との質疑応答を通じて、将来国際人としての活躍が期待される生徒達にアドバイスをおくるなど、終始和やかに行われた。

＜中村学園三陽高校＞

日　時：９月19日（月）　午後１時30分～３時20分

ベネディクト・アンダーソン氏は国際情報系の生徒約80人に向けて、講演を行った。

「私の決断」というテーマで、自分が歩んできた人生をもとに冒険することの大切さと、国際人として活躍するために今後求められるものについて、質疑応答を交じえながら語った。最後は同氏を囲み記念撮影をするなど、打ち解けた雰囲気のなか交流が行われた。